甘味館

神々のあらそい

「おはようございます、今日は良い朝ですね天海さん。今日も起きられて偉いですね」
聞き慣れた機械音声で目を覚ます。今日も良い朝だ。確か昨日は「一日頑張ろう」と言っていた。毎日違う声かけをしてくれるここの機械はすばらしい。
朝起きたらまず、コップ一杯のガムシロップを飲む。うん。
「おはようございます天海さん。本日もお変わりないですか」
担当の先生がやってきた。
「はい。ありがとうございます」
「それは最高ですね。では本日も精一杯思索に励んでください」
「はい。ありがとうございます」
先生はにこやかな笑顔を残して去っていった。では思索にいこう。思索と言っても難しいものではなく、書庫にたくさんある本を自分の部屋に持ってきて読むだけだ。本は面白いから、すぐに一日が過ぎてしまう。部屋もベッドと机の他は何もなくて一面の白い壁だから、読書に集中することができる。今日は何を読もうかと考えながら書庫に着くと、職員の人と目があった。
「こんにちは」
「こんにちは」
「今日のおすすめの本はこちらになります」
なるほど。面白そうだ。
「では、これをお願いします」
「はい、ではお運びしておきますね」
「ありがとうございます」
書庫をあとにして部屋に戻ると、既に本が七巻ベッドの上に置かれていた。ありがたい。ではさっそく読むとしよう。

※

「天海さん、お昼ご飯の時間ですよ」
ちょうど三巻を読み終えたところで、また先生がやってきた。
「はぁい」
「今日のお昼ご飯はチョコレートの甘煮とコーラプリンです」
「ありがとうございます」
お昼ご飯だ。プリンがプルプルとした食感でおいしかった。
ここは本当に良いところだ。一ヶ月くらい前からここにいるが、毎日楽しく過ごせるしご飯も出てくるし最高の場所だ。たまたま工事現場の横を通ったときにバケツの水を被ってしまい、その治療でここに来たのだが、こんなすばらしい場所に来られたのだから縁も良いものだと思った。
いや、過去のことより未来のことだ。続きを読もう。

※

「天海さん、夜ご飯の時間ですよ」
機械の音がして部屋の自動ドアが開き、先生がやってきた。本はまだ途中だ。
「すみません、もう少し読みたいです」
「なるほど、感情表現が苦手な女の子と頑張り屋な男の子のお話ですか。私も絵柄が好きですよ。では良いです、ご飯はそのあと食べてくださいね」

「はい、ありがとうございます」

※

面白かった。二人が幸せになれて良かった。読んでいるこちらまで幸せな気分になることができた。今日の夜ご飯は生クリームようかんと水あめゼリーだ。涼しげな見た目でおいしかった。

夜ご飯を食べ終わって、一日が終わってしまった。こうして過ごしているとあっという間に明日が来てしまう。今日はもう寝よう。

明日はどのような声掛けで起こしてくれるのだろうか。楽しみだ。

※

※